

## アラビア湾岸の交易都市 ハレイラ島の発掘 展

佐々木達夫<sup>\*1</sup>, 大浜菜緒<sup>\*2</sup>, 在田則子<sup>\*3</sup>

金沢大学文学部考古学講座は、1987年以来、アラビア湾岸のアラブ首長国連邦で交易都市遺跡を調査している。今回の展覧会では、1995年11月中旬から1996年1月初旬に行った発掘の成果を紹介した。

会場は金沢大学資料館、期間は1996年6月10日～7月6日、主な展示資料は図面56枚・写真80点・解説パネル5枚等、主催は金沢大学資料館および・金沢大学文学部考古学研究室、後援は北国新聞社。図録は『アラビア湾岸の交易都市ハレイラ島の発掘展』を刊行。企画・執筆は在田則子、大浜菜緒、橋爪直子、楠寛輝、佐々木達夫、展示協力は岩田安之、波頭桂、九千房百合、向井互、井貫昇平、酒井中、森満理。ギャラリートークを6月19日（水曜日）午後2時から行い、展覧会関連の研究会を7月6日～7日「ヘレニズム～イスラーム考古学研究会」と題し、金沢大学文学部A201室で開催した。

展覧会の目的は次のとおり。実物資料に触れる基礎的包括的な学生教育を行う。大学内で行われている研究・教育の成果を、資料館を通して学外へ視覚的に紹介する。

アラブ首長国連邦で交易都市遺跡を調査研究する目的は、古代・中世における海上貿易史の資料を層位的に把握することである。調査の概要を以下に紹介する。ハレイラ島は8kmの細長い岸に沿う島で、対岸の平坦部や山並と、狭いラグーンのコール・クワイルで隔てられている。現在の都市ラムスは島の南方に、クリークを挟んで位置している。植物のまねな砂と岩だけの島であるが、1995年は2ヶ月の調査中に3週間も雨が降るという過去に例がない天候になり、緑あふれる島に変貌した。

1994年度の第1次発掘で、砂丘上に位置する9世紀の軍隊駐屯地の調査を終え、今回展覧した1995年度の第2次発掘で、5－8世紀のササン・初期イスラーム時代の住居跡群（D区）と、16－17世紀の貝塚（C

区）を調査した。5－8世紀という時代の遺跡の発見はアラビア湾岸で珍しく、とくにササン朝後半からウマイヤ朝時代の特徴を示す資料は、日本人が初めて発掘した研究資料になる。

D区はハレイラ島南端の海際の平坦な地で、長さ30m、幅20mの発掘区をほぼ全面発掘した。地表面の砂を剥ぐと、多くの小石が現れた。雑然と散在しているように見えた石の広がりをつたえ、家の輪郭が見えてきた。少なくとも3軒の家の存在が推定できた。壁石に多く使用されたのは砂と貝が固まってできた石であった。住居の一部は床面が焼けていること、遺物の多くに焼けた痕があることなどから、火災にあったと推測できる。漆喰を貼った床面には、多くの陶器壺が潰れた状態で残っていた。

住居は多くの炉をとめない、炉跡からは魚骨、貝が多数出土した。出土品は骨・貝のほかにも、無釉、施釉の陶器、ガラス製の瓶やビーズ、動物の文様を刻んだリング・ストーン、瓶の底、蓋、貝製のビーズ、金属製品など多種多様であり、かなりの量になった。メソポタミアの陶器や現地産の土器など陶磁器の量が多い。ササン朝前半までの施釉陶器については、他の遺跡でフランス人が編年したが、それ以後の空白部分を埋める資料を入手したことは学問的に意義深い。また、アラビア湾岸で最古となる中国銭が一枚発見され、その歴史的な意味も大きい。

C区は島の南端沿岸に位置し、17世紀頃の貝殻や陶磁器片が散乱するゴミ堆積層、すなわち貝塚である。貝塚からは東南アジアや中国の製品も出土している。この地域に連続する平坦地D区では、ササン・ウマイヤ朝の石造り壁の住居群が発見された。CD地域はラグーンに入る水路に沿い、この地域は港湾施設をもつ都市跡と推定できた。

(1.文学部 考古学,2.文学研究科 考古学,3.資料館)



会場風景 平成8年6月

